

報道雑誌の文体 複合語・複合語的表現とその用法の特徴

宮崎 彰 男

English in Journalism Compound Words and their Similar Expressions

Akio MIYAZAKI

1. はじめに

報道雑誌においてはいくつかの文体的特徴が見られる。例えば、見出しや副見出しにおいてはすでに起こった出来事を述べる場合も通常は過去時制を使わないとか、また将来のことを述べる場合も助動詞による未来時の表現を使わないとか、さらに音韻的、統語的反復による工夫がしばしば生じるといった特徴がある。この小論では、特に、複合語ならびに複合語的表現の使用に焦点を絞り、具体例を挙げつつそれらがどのように使われているのか調査し、さらにその使用にはどのような意味があるのか考えてみる。資料はもっぱら *Time* と *Newsweek* の2つの報道雑誌を拠り所としている。その理由は両誌とも入手しやすく、英語を使用言語とする報道雑誌の1つのモデルと広く考えられていると言えるからである。

さて、最初にもう1つ述べておくべきと思えることがある。これまで文体をその関心の対象としてきた分野はしばしば文体論と呼ばれてきた。その研究のほとんどが文学にその調査対象を限定してきたことから、文体論と文学の結び付きは非常に強いものがある。その結果、この分野と文学批評の係わりも深いことはよく知られているところであり、文体と言えはそれは文学作品の言語表現に係わるものという受け取り方が多い。これは文学的言語というものはそれ以外のコンテキストで使用される言語と比べ、本質的に優れた言語であるという考え方に由来するものである。かつては文法書において示される例はほとんど文学作品からであった。これは文学的言語が権威あるものとされてきたからであろう。このような考え方はかなり一般に受け入れられていたように思える。一昔前には大学の演習や講義で雑誌や広告の英語を扱うと学生もとまどう状況があったが、これはそのことを表している。しかし、ある言語（ここでは英語であるが）を研究するにはさまざまなコンテキストにおける実際の言語使用を観察するべきは当然のことである。それがその言語の実際の使われ方を全体として示すことに通じるからである。実際、文学以外のコンテキストにおける言語表現にもさまざまな工夫が見られるのである。

このような立場も踏まえて、以下、報道雑誌の英語に見られる複合語・複合語的表現について述べる。

2. 報道雑誌の複合語・複合語化表現

複合語とは、一般に、複数の既存の語が結合してできた語のことである。書記形式では、結合項目が直接連結されるタイプ、結合項目間に単にスペースが置かれるだけのタイプ、さらに、ハイフオンで連結されるタイプがある。例えば、*bathroom*や*living room*などは最初の2つのタイプ、*visitor-friendly*などは最後のタイプである。これから取り扱う事例の多くはこれら3つのタイプのうち最後のハイフオンで連結されているタイプに属するものである。

さて、このような書記形式における相違は別にして、さらに留意すべき相違がある。いま例として使った複合語を別の観点から見ると、例えば、*bathroom*や*living room*はもうすでによく使われて日常化してしまい、それらの構成素をあまり意識させない固定化された複合語、あるいは、複合語とそれほど感じられない単なる語、と行うことができよう。これらは一般にほとんどの辞書に立項されている。一方、*visitor-friendly*にあっては相対的に見てまだ2つの項目のつながりを意識させる。調査した辞書の範囲では、これを1つの項目として立てている扱いは見あたらなかった。使用した辞書は

The Random House Dictionary of the English Language (The Unabridged Edition). New York: Random House, 1970. — 以下、*RHD*.

Cambridge International Dictionary of English. Cambridge: Cambridge University Press, 1995. — 以下、*CIDE*.

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English (Fourth Edition). Oxford: Oxford University Press, 1989. — 以下、*OALD*.

Longman Dictionary of Contemporary English (Second Edition). London: Longman, 1987. — 以下、*LDCE*.

『新英和大辞典』. 東京: 研究社, 1981. — 以下、「新英和大」

『新グローバル英和辞典』. 東京: 三省堂, 1994. — 以下、「グローバル」

『プログレッシブ英和中辞典』. 東京: 小学館, 1987. — 以下、「プログ」

である。これらのうち、*CIDE*と「グローバル」には結合辞として *-friendly* の項目が立てられ、幾つかの複合語が例として記載されている。*CIDE*では *ozone-friendly*, *dolphin-friendly*, *user-friendly* の3例を、他方「グローバル」では *user-friendly*, *ozone-friendly*, *family-friendly* の3例が挙げられている。*visitor-friendly* はいずれにも例示されていない。*-friendly* は生産的な結合辞の1つでいろいろな複合語を生み出すことが可能である。そういう意味でこの結合辞による複合語が逐一辞書に立項されていないことは理解できないことではないが、この結合辞を掲載している辞書が2つだけでそれらが1994年と1995年に出的ものであること、さらにそれらにおいてもこの結合辞の項目の下に *visitor-friendly* が例示されていないことを考えると、これは *bothroom* や *living room* と比較して2つの項目のつながりをより我々に直観的に意識させ、手垢の付いていない新しさを感じさせると言えるだろう。¹

以下で論じる事例はこのような比較的新しいと感じさせる複合語ならびにそれよりもはるかに大胆な複合語化された表現である。両者の区別を明確にすることのできない事例が多いが、結果的にはどちらも単一の語が形容詞として、あるいは名詞として文構造で機能するのと同じ機能を果たしている。そういう意味では両者とも複合語として扱うことも可能である。しかし一方では、単に複合語と呼ぶにはあまりにも元の句や文が明白に目に映る事例もある。こういう

事情を考慮して、以下においては「複合語」と並行して「複合語的表現」という呼称を便宜的に用いることとする。

3. 形容詞的な複合語・複合語的表現

3. 1. 句に由来する具体例

まず、構成項目が2つの事例を見てみよう。²

- (1) Joggers must run at night if they hope to breathe freely, and in some areas a television glowing through a window can become a target for a *drive-by* shooter.

(*Time*. November 18, 1991)

drive-by shooter とは「車を走行中（車から不特定の人を狙って）銃を発射する人」のことである。日本で言えば、いわゆる通り魔的殺人者に相当する。車と銃の氾濫しているアメリカ合衆国という現実をこの複合語の背後に見ることができる。言語構造的にはこの複合語の背後には動詞句、もう少し限定すれば、定形動詞句があると言えよう。つまり、Someone drives by. といった文の動詞句に由来している。これは上記の辞書のうち「グローバル」のみが立項しているという点で比較的新しい複合語であると考えられる。この辞書では名詞として類別され、「[米]走行中の車からの発砲((犯罪; drive-by shooting とも言う))」と記述されている。しかし、調査した資料の中には、*drive-by*が(1)においては shooter の前置修飾要素であったように、shooting 以外の名詞とも共起し、前置修飾要素となっている例がさらにある。例えば、話題は類似しているが、America Is Red, White and Bleeding という見出しを付けられた記事の本文中の1つの小見出しは *Drive-by* stabbings (*Newsweek*. September 27, 1993) と表されている。しかし、銃による走行中の車からの殺人とは係わりのない話題の中でもこの複合語は使われている。次の引用はある英国の俳優の所業に関する記事の見出しと副見出しである。

- (2) A *Drive-By* Scandal

Hollywood: Hugh Grant gets arrested for 'lewd conduct'
— and it may actually help his career. That's showbiz.

(*Newsweek*. July 10, 1995)

(2) において *drive-by* が修飾している scandal は、shooting, shooter が動詞 shoot に、stabbing が動詞に stab に由来するのに対して (Someone shoots/stabs others when s/he drives by.), 純然たる名詞である (*Someone scandals when s/he drives by.). この点でもこれはいくらか異なった連結であると言えよう。それはともかく、この俳優の、本文で報じられているところでは、車の中での行きずりの女性との行為は、行き当たりばったりの、衝動的なものであったらしく、社会的な性道徳に反すると認められた。つまり、犯罪である。この類似性がこの連結を可能にしていると言えると同時に、書き手はその類似性を読者に伝達するために、そしてそれもセンセーショナルに伝える意図を持って、このような連結を使ったと言えるだろう。

いま観察した複合語は〈動詞＋副詞〉という形式であったが、次の例は〈動詞＋補語〉形式にある。

- (3) Without a strong sense of personal sin there can be no guilt -- and little cause for shame... Of course, some adults do suffer from a neurotic fixation on childhood

feelings of shame. But in many manuals of *feel-good* pop psychology, this neurosis is used to dismiss the need for a realistic and well-instructed conscience.

(*Newsweek*, February 6, 1995)

これは The Return of SHAME という見出しの付けられたアメリカ合衆国のモラルの現状についての記事の中にある What Ever Happened to Sin? と題された囲み記事の 1 節である。ここでは、要するに、何か悪いことをして感じる恥ずかしいという意識や罪悪感人を神経症に陥らせることが多いから、良心を持つ必要があるといった考えはまともに考慮しなくてよいといま流行の心理学の多くのマニュアルでは教えている、といったことが述べられている。

さて、*feel-good* は先にも述べたように＜動詞＋補語＞であり、Someone/Something feels good. がその背後にある。参考になっている辞書の中では、*CIDE* に記述が見られるだけである。そこでは、しかし、“feelgood” という直接連結された形式で立項されていて、形容詞と類別され、“causing happy and positive feelings about life” という定義が与えられている。その定義の付加情報として、いわゆる「是認的」あるいは「軽蔑的」といった特徴付けはないが、定義の内容自体は、肯定的に理解すれば「前向きの」を意味し、別の受け取り方をすれば「嫌なことを忘れさせる表面的な」を含意している可能性があるように思える。次の例を後者のように解釈することは行き過ぎであろうか。

(4) Bush outlines a *feel-good* plan for
fighting the recession, which may
help his re-election prospects
more than the ailing economy

(*Time*, February 10, 1992)

これは当時のアメリカ合衆国大統領ブッシュの年頭教書に関する記事の副見出しである。彼は景気後退に対するプランの概要を述べたがそれは病んでいる経済よりも自分の再選の展望にてこ入れするかも知れない、とはいくらかアイロニカルな響きを感じられる。この副見出しのレイアウトは原文のままであるが、3 行目と 4 行目の行末にほぼ等価的構造を持つ名詞句 his re-election prospects と the ailing economy を対立的に配置していることもこのアイロニカルな響きを補強している。plan を修飾している問題の *feel-good* は、その口語的な軽さにおいて、副見出しで言及された内容的に重みのないと受け取れるプランと呼応している。そういう角度からこの *feel-good* を考えてみると、上で言及した否定的な含意がここにはあると言えるだろう。このことは (3) における *feel-good* の場合にも幾分あてはまる可能性があるだろう。このような複合語の使用はそれによって、問題とされていることについての書き手の視点を暗示することを可能にすると同時に、読者の解釈を書き手の視点からの解釈に限定することを可能にする手段の 1 つと言えるだろう。

これまで見てきた例は 2 つの項目から成る複合語であった。しかし、資料としている報道雑誌には項目数が 2 つ以上の形式がしばしば現れている。次の改革解放政策が中国の人々に考え方の点でどのような影響を与えているかということについて報じている記事の 1 節には、そのような例が見られる。

(5) The economic reforms of recent years have also fueled a *get-rich-at-any-price* mentality. Says a Western academic in Beijing: “The problem of a commodity economy is that everything becomes a commodity, even human beings.”

(*Time*, November 11, 1991)

この例は(3)や(4)と同じ線上にある〈動詞＋補語＋前置詞句〉という構造を持っている。そして、その構成要素の項目数は5つである。その項目数の多さは必然的に読者の目を引くと言えよう。これまでの例もその背後には句があったわけであるが、*get-rich-at-any-price*は一見して句そのものの存在を明らかにしている。報道雑誌にはこのような複合語的表現が実によく生じている。

ここで興味深いのは、もしこのような前置修飾を使わなければどのような言い方になるだろうかということである。このことを考えてゆくとさらにこの小論で観察しているような複合語もしくは複合語化された表現の使用の持つ文体上の効果が明らかになってくると思える。

先程の(3)の *feel-good pop psychology* の場合は *the pop psychology which feels good* と言い換えることができるだろう。この場合は比較的簡単である。しかし、(5)の *get-rich-at-any-price mentality* にあっては *feel-good pop psychology* のように関係代名詞を補足し、動詞を定形に変えるだけではなんともならない。*get-rich-at-any-price* を機械的に後置修飾構造に移行することはできないということである。敢えて言い換えれば、*the mentality which forces someone to try to get rich at any price* と言えるかもしれない。これ以外の言い換えの可能性は勿論あるだろうが、ここで明らかなことは言い換えはかなり冗長にならざるをえないということである。この点は先程の(1)の *drive-by shooter* の場合にもあてはまる。これは *a shooter who shoots others when s/he drives by* と書き換えることが可能であろうが、その冗長さと *shooter* と *shoot* による無用の意味的反復は元の名詞句の簡潔さと好対照をなすことであろう。³

このように複合語・複合語的表現が冗長を避け、軽快な簡潔さを求めるために使われている例は雑誌においてしばしば見られるところである。次の例もこのことを例証していると言えるだろう。

- (6) In the rush to deploy [100 ground-based interceptors by 1997]... the military will have to design and start buying SDI before any of the missiles, radar or communications involved are tested. The proposal... violates the *fly-before-buy* principles that Pentagon leaders "have labored so hard to put into place."

(*Time*, June 15, 1992)

fly-before-buy principles は principles which directs someone to fly something before s/he buys it と言い換えることができるだろう。しかし、このような言い換えはかなり冗長である。そして、かりにこのように言い換えてもこれを原文に入れることはまず難しい。原文にはすでに principles を後置修飾する関係詞節が使われているからである。

次の例では後置修飾はまず不可能と考えられる。

- (7) And given the *divorcing-any-day-now* couple's nasty two-year separation, it's unlikely the smooch signaled lingering affection. (*Newsweek*, May 22, 1995)

couple を主要語とする名詞句を後置修飾によって書き換えれば、*the couple who are divorcing any day now* となるだろう。しかし全体としてはこの名詞句もそれを含む separation を主要語とする名詞句の1つの前置修飾要素であるから、このように後置することは不可能である。このことがこのような形式を形成することにつながる表現上の工夫を生む一方、読者の側ではそれを新鮮なものと受け取ることになるのである。

さて、次は(7)と異なり後置修飾も選択可能であり、それによって内容的にはほぼ同じこ

とが表現できると思える例である。

- (8) On an emotional, *see-and-be-seen* tour of South Asia, Hillary and Chelsea Clinton found kinship with millions of other women and young girls.

(*Time*, April 17, 1995)

ここで問題の名詞句を後置修飾によって言い直してみると、an emotional tour of South Asia on which someone sees others and (s/he) is seen by others というような形になるかもしれない。しかし、このようにすれば最初の簡潔さが失われるだけでなく、意味的に緊密な関係があると考えられる emotional と *see-and-be-seen* が分断されてしまう。ヒラリーと娘切尔西のこの旅行が「感激的」であったのは東アジアの女性たちとの「出会い」があったからである。このように複合語化して前置修飾を可能にすることにより、意味的に近い関係にある項目を構造的位置においても近接させることが意図されていると考えられよう。

これまで観察してきた例は動詞を中心としている複合語・複合語的表現で、(7) の *divorcing-any-day-now* を除き、その動詞は定形と考えることのできるものであった。次にこの例外と同じく動詞が非定形である事例を挙げておこう。以下、問題となる部分だけを引用する。

- (9) the *no-longer-ruling* LDP (*Newsweek*, August 16, 1993)

- (10) the *gushing-and-goshing* Tilden-Davis (*Time*, December 23, 1991)

- (11) the *still-to-be-ratified* North American Free Trade Agreement
(*Time*, February 22, 1993)

- (12) a *soon-to-be-appointed* high-level group (*Time*, July 13, 1992)

- (13) Its *easy-to-use* techniques (*Esquire*, February 1995)

上の例のうち(9)と(10)は-ing形を含んでおり、(11)(12)(13)はto不定詞を含んでいる。このような非定形の動詞を含むものには、これらの例に見られるように、no longer とか yet のような「時」の副詞が第1の項目になることが多い。(13)はその中の最初の項目が副詞ではなく、形容詞である。(10)の *gushing-and-goshing* は副詞にも形容詞にも導かれていない点で残りの例と異なっている。この複合語はそういう特異性だけでなく、gosh という通常は感嘆詞と分類される gosh を動詞として使っている点で特異な表現である。

もうひとつ動詞句に由来する特異な事例を挙げておかねばならない。これまで観察してきた例は動詞がその中心的要素であったが、次の例は助動詞を含んでいるという点でめずらしい。

- (14) For Clinton, New York was a *must-win* state. (*Time*, April 13, 1992)

問題の名詞句を言い換えれば a state where s/he must win という形になるだろう。このような例は複合語的表現の豊かな可能性を示していると言えるだろう。

さて一方で、動詞をその構成項目として含まない例も多くある。そのような事例をいくつか挙げてみよう。*Gloves-Off Approach* (*Time*, March 13, 1995) はコロンビアに関する記事の主見出しで、そこでは麻薬に対するアメリカ合衆国の取り組みを報じている。調査した辞書でこれを項目にしている辞書はないが、glove の項目の下では *OALD*、「新英和大」、「グローバル」、「プログ」が “the gloves are off, with the gloves off, handle with gloves off, take one's gloves off” などの成句を示している。このようないわゆる成句に由来しているが、同様に、調査した辞書には立項されていない例の1つとして a *bolt-from-the-blue* Soviet attack on the U.S. (*Time*, August 5, 1991) を挙げることができよう。しかしながら、アフリカのいくつかの国々での同じ人種が相争う悲惨な状況を述べている記事 When the World Shrugs

の副見出し Why *black-on-black* violence is so often balked out (*Newsweek*, April 15, 1994) の *black-on-black*⁴ やクリントン米国大統領の軍隊における同性愛者に関する方針について述べている記事の中に現れている the *gays-in-the-military* crisis (*Time*, February 8, 1993) の *gays-in-the-military*などは、成句に由来するものではなく、その時その時の出来事に係わってタイムリーな試みをしようとした表現上の工夫から生まれているものと言うことが可能であろう。このことは現在では聞き慣れたと思える the *numerical-import-target* imbroglio (*Time*, February 21, 1994) にあってもあてはまる。

これまで挙げた例はすべて名詞を前置修飾する形容詞として機能しているものであった。機能上それらとは異なるが、副詞を前置修飾している例を最後に示す。

- (15) Meanwhile, Simi Vallen -- 80 % white, 13 % Hispanic, 5 % Asian, only 2 % black -- is a pristine bedroom community of just over 100, 00, where the average price of a home is \$230, 000. Much of it is so *fresh-out-of-the-cellophane* new that in some shopping malls the trees are not yet shade size. (*Time*, May 18, 1992)

so *fresh-out-of-the-cellophane* new that... とは「セロハンの包装から取り出したばかりのようにまっさらなので...」といったことを表しているのであろう。この新興のベッドタウンの新しさがこの副詞として機能している複合語的表現によってリアルに表現され、書き手の強調の意図はよく達成されている。*fresh-out-of-the-cellophane* は名詞を後続させれば形容詞として機能する可能性を持っているが、一般に、この小論で論じているような複合語ないし複合語化された表現が副詞と連結してそれを前置修飾する事例は大変まれである。

以上、句から生じている事例を観察してきた。次の節ではさらに、文から生じていると考えられる表現の事例を見ていくことにする。

3. 2. 文に由来する具体例

これまで観察してきた句に由来するものと比較すると、ここで扱う文に由来する複合語化表現はそれ程しばしば見られるものではない。次の例は前回のアメリカ合衆国大統領選挙戦で共和党と民主党の攻撃合戦が候補者の夫人に関することにまで及んでいることを示している記事の1節である。

- (16) The *our-wife-can-top-your-wife* game can be carried too far. No sooner had Bush been accused of infidelity than Republican Party chairman Rich Bond attacked Mrs. Clinton for likening marriage to slavery -- a gross distortion of an educational review article she wrote in 1973. (*Time*, August 24, 1992)

ここではハイフンを削除すればまさに文になる連鎖が game を前置修飾している。この1節はまぎれもなくこの記事の伝達者である書き手が書いているわけであるが、読者にはこの1節の背後に書き手の声よりも、むしろ互いに攻撃し合っている人々の声を聞くような印象を持つ。書き手はここでは攻撃合戦の熱気をよりリアルに伝えることを意図して、現場でもしかしたら耳にするかもしれないような発話を創作していると考えられよう。このような考え方を支持すると思えるのが次の例である。

- (17) There remains a huge problem: Japan's ruling Liberal Democratic Party desperately wants to prove its commitment to Cambodia by contributing people, not just cash, to the U. N. effort. Anything short of that, Tokyo knows, would lead the

rest of the world to dismiss its Cambodian policy as yet another example of Tokyo's
 “we’ll hold your coat” diplomacy. (Newsweek, April 13, 1992)

(17) では(16)のように問題の部分にハイフンは挿入されていない。さらに、書き手の地の文ではないことを明示する引用符号がその初めと終わりに施されている。このことは(16)についての考え方を明確に支持していると言えよう。weがここで指し示している実体は日本政府であるから、この引用部は明らかに日本政府によると受け取ることのできるような示し方である。しかし、実際には日本政府のだれかが「我々はあなた方の服を持てよう。(あなた方が汗を流してくれ。)」といった自分たちのマイナスのイメージをあたえるであろうようなことを述べたとは考えられない。これは書き手の創作である。しかし、あたかも日本政府が言っていること、言ったかも知れないこと、あるいは、言いそうなこととしてこの前置修飾部を読者に提示しているのである。

上の2つの例(16)(17)は平叙文に由来するものであった。文のタイプはこれ以外に疑問文と命令文があるが、これら3つのタイプのうち平叙文と命令文に由来する表現が最もよく見られる。命令文に由来するものを以下いくつか例示してみよう。関連部分のみを引用する。

(18) Hosokawa’s *don’t-rock-the-boat* comments (Newsweek, August 23, 1993)

(19) a *move-or-we-shoot* ultimatum (Time, January 18, 1993)

(20) the kind of massive, *overwhelm-’em-with-firepower* kind of war that American
 generals have always preferred to fight (Newsweek, August 23, 1993)

(18) は否定命令文から生じている。(19) は命令文+接続詞+平叙文という重文構造から生じている点で興味深い例である。(20) では them の語頭の子音が脱落した’emが見られる。このことは先の(16)と(17)にあって述べたような発話的性質とともにこれらの表現が口語的で、幾分くだけた性格のものであることを物語っていると言えよう。そして、それは述べていることに対する書き手の判断や態度、ならびに、述べられていることに関与する人物の情緒などを表出する道を開く可能性がある。次の(21)はオーストラリアのかつての首相フォーク氏が政界を引退して3年後に出版した回顧録で同国の政党や政治家を痛烈に批判していることについての記事の見出しであるが、これはいま述べたことを示す1例となろう。

(21) A *Ripping Give-’em-Hell*

Farewell to Politics (Time, September 5, 1994)

疑問文から生じた例としては以下の2つの例を確認している。

(22) “*Wow! Where’s the swimsuit?*” photos (Time, August 12, 1991)

これは1992年用の2つのカレンダーをコミカルに紹介している記事からである。それぞれ有名なスーパーモデルの写真を売り物にしたカレンダーで、記事では値段や写真の数など10の項目を挙げて両者を比較している。上の引用はそれらの項目の1つで、ここでは省いたがこの項目の右に写真の枚数が書かれている。このような複合語的表現による前置修飾はかなり口語的でくだけた、遊び気分のコンテキストにその使用域があると言えよう。

次の例も(22)にあってと同じようなことが言える。記事はある人気テレビ女優とドラマの型破りな浜辺での結婚式を述べているのだが、状況がいくらかわかりやすいように見出しと後に続く本文の最初の文を引用する。

(23) The Bride Wore

White -- Barely

You know that it's one of *those Hey-why-don't-we-get-married-today?* weddings when the judge tying the knot is the best-dressed person at the ceremony.

(*Time*, March 6, 1995)

これら2つの例に見られる複合語的表現は(23)で伝えられている出来事と同じくかなり大胆で、型破りである。最初の文字を大文字にしてあるのは、疑問符を末尾に付けた手前そうしないと落ち着かないということからきているのだろうか。(22)(23)とも間投詞に導かれていることも興味深い。いずれにせよ、この種の表現は書き手の遊び気分ないしは述べられている出来事の軽さを簡潔に伝える手段である。

4. 名詞的な複合語・複合語化表現

前節の3で取り扱った前置修飾要素として働く複合語ならびに複合語化表現に比べ、名詞的な事例は数が少ない。以下同様に、句と文に由来する例に分けて観察する。

4. 1. 句に由来する具体例

(24) The U. N. receives a *go-along* to send relief to starving Somalia.

(*Time*, August 24, 1992)

(25) The last possibility seems to be the one preferred by many officials in the Bush Administration, although *wait-and-see* is the only currently announced policy.

(*Time*, September 9, 1991)

これら2つの複合語は a *go-along* sign とか a *wait-and-see* policy/attitude のように適当な名詞を後続させれば前置修飾要素として機能する可能性を持っている。どちらかと言うとそういう使われ方のほうが確率が高いと言えよう。一方、両者はさらにいずれも動詞句から生じているという共通点を持っているが、*go-along*は冠詞が添えられているのに*wait-and-see*は単独で表れているという違いがある。このことは*go-along*の方が*wait-and-see*よりも通常の名詞——一般に辞書で名詞と確認されている名詞——と同列に意識されている度合いが高いことを示しているとも考えられる。そのことは逆に後者が相対的に見て注意を引く名詞的複合語とすることができるだろう。とはいえ、いずれも調査した辞書には名詞として立項されていない。

もう2つ例を挙げよう。

(26) He is a charismatic former southern *governor-turned-national-leader* with a pledge to reform government.

(*Time*, February 21, 1994)

(27) And Oscar de la Renta's ladylike suits brought a sigh of relief from the *ladies-who-wouldn't-lunch-in-a-slip-dress*.

(*Newsweek*, November 15, 1993)

(26)はクリントン氏に関する記事から、(27)はファッションを取り扱った記事から採ったものである。いずれもハイフオンをすべて削除してもその結果は英語の文としておかしくない連鎖がある。*governor turned national leader*はこれで「国家の指導者となった知事」を表す名詞句である。変わった表現であるが、X (who (has)) turned Y のような形式がその背後にあるのであろうか。しかし、実際には外側の括弧内の部分を削除した形で名詞句として使われている。

さて、いま述べたようにいずれもハイフオンを取り去っても全く伝達される基本的意味は変

わらないのに、わざわざこのような形式を使っている理由はどのようなものであろうか。それはまずもって目立たせるということ以外にないように考えられる。読者はそのハイフン付きの、他の語と異なる形式によって視覚的に問題の部分に注意を向けざるをえない。そして、ハイフンはそれによって結ばれた複数の項目——特に、(27) では8つである——を単一の要素と認識させる。左から右につながる連鎖の中で、その始まりと終わりを明確に認識させる。連鎖の中の他の部分と分離された部分が1つの固まりとして読者の目に飛び込み、そして、頭に飛び込むのである。このことはこの小論で扱っているすべての複合語的な表現にあてはまることであるが、(27) の例は目立たせるということに関しては典型的な例と言えよう。

4. 2. 文に由来する具体例

これに該当するものは収集した資料では以下の例だけである。

- (28) That casual air of *boys-will-be-boys* struck many residents as inappropriate, given some of the complaints. (Time, April 5, 1993)

この1節はアメリカ合衆国のある町に見られる少年たちの性犯罪を取り上げた記事から採られたものである。どちらかと言うと一般的なことわざがここでは複合語化して使われている。これは4.1.で言及した(24)の*go-along*や(25)の*wait-and-see*と同じく、That casual *boys-will-be-boys* air と言い直し、前置修飾としても使えるように思える。しかし、air を of を伴った句によって後ろから修飾しようとも、また、いま言い換えた形で前から修飾しようとも、このような複合語による表現は、それを使わない形式がどのようなものだろうかと考えてみると、簡潔性の点で際立っていると言えよう。

5. 複合語・複合語的表現の文体的効果

Quirk et al (1985) は句から生じた前置修飾について述べている中で、an *up-to-date* timetable のようなすでに日常化した表現と her *too-simple-to-be-true* dress のようなまだ日常化しているとは言いにくい表現とを区別し、後者について「くだけた、口語的脈絡においてのみ利用される傾向があり、ほとんどの場合、奇抜、慣習軽蔑的、その時限りの使用に起因するごちなさという趣を持っている（そしてそれも意図的にそうであるように思える）」⁵ と言っている。また、文に由来する前置修飾に関しては、ほとんどの場合「文による前置修飾にはとっぴな、即興的な感じがある」⁶ と述べている。

この小論における具体例を通して、Quirk たちの述べている一般的な特徴のほとんどは例証されている。具体例を論じる中で、それらの目新しさ、それゆえに我々の注意を引き付けることも述べた。新しいがゆえにそれは既存の表現との対立をはらみ、その背後に社会に背を向ける姿勢が隠れている場合もあろう。これらは複合語・複合語的表現の一般的な特徴であり、その本質は、目立つこと、つまり、それ自体の表現形式に必然的に読者の目を向けさせる目新しさである。

この小論では一般的特徴のみならず、この本質的な特徴ならびに簡潔さ——単に簡潔というだけでなく、1つの固まりで情報を提示する特徴——が報道雑誌においていかに利用されているかということを観察してきた。報道するからにはその情報が伝達されなければならない。読者が記事に目を止めなければ何も始まらない。その点で具体例の中には見出しから採られたも

のいくつかあったが、これは当然のことである。さらに、伝達する側の書き手は読者が引き続き本文を読むようにする努力をしなければならない。複合語化された表現の文体的効果はそれが持つ新しさと簡潔さの程度にこのことに奉仕する。さらに、書き手は読者が単に読み続けるだけでなく、書き手の視点と同じ視点で読んで（解釈して）くれることを望むものである。書き手は複合語・複合語的表現の目新しさと簡潔さによって、効率よく自分が述べている出来事または人物にどのような態度を取っているか読者に伝え、場合によっては読者が気づかないままにそのような態度を読者に植え付けることも可能である。また、これらの持つ口語的特徴のゆえに、見出しと本文のいずれにおいてもそこで述べられている場面の状況をリアルに読者に伝達し、それらに関する書き手の態度を読者に暗黙のうちに共有するように促すことも可能である。以上の複合語・複合語化表現が実際の使用の中でもたらす文体的効果はその一般的特徴とともにこの表現の可能性に係わる重要な特徴である。

6. おわりに

初めにも述べたように、報道雑誌にはいくつかの文体的特徴が観察される。これまで見てきた複合語・複合語化表現の使用もその1つであり、それによって効果的に書き手が読者に働きかけるコミュニケーション作用の1面が示されたと考える。複合語・複合語的表現の元となっている句や文あるいはそれに基づいた言い換えを使わずに複合語・複合語的表現を使うことによって基本的意味を越えた文体的意味が伝達される。また、そのような言い換えではなく統語的にも語彙的にも異なる表現を使った場合と複合語・複合語的表現を使った場合とは同じ出来事を述べても異なる視点が示される。このような選択も大いに文体的意味に係わっている。このように選択による文体的意味の伝達作用が文学以外のコンテキストにおいても日常的に、想像力に基づいて創造的に行われていることは興味深い。さまざまな種類の英語にさらに関心が向けられるべきであろう。

注

1 *visitor-friendly*は*Essex Countryside Magazine*, Vol. 42, Issue 455, November 1994 で確認している。

なお、ここでの区別をあまり意識しないという反応もあるかもしれないが、雑誌に実際に生じている例は*visitor-friendly*といったものよりはるかにインパクトの強い事例である。

2 以下の引用例において問題にする点をわかりやすくするため、その部分を斜字体で表記する。

3 (3) の *a feel-good plan* は *a plan which makes someone feel good* と、(4) の *feel-good pop psychology* は *the pop psychology which makes someone feel good* とも言い換えることが可能であろう。こういう解釈を採れば *feel-good* も同様に簡潔さに寄与している例となろう。

4 この複合語の表現力は、この副見出し全体の中で考慮されるとき、さらに興味深く議論することが可能だろう。

5 Randolph Quirk et al (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language* (London and New York: Longman), p. 1336.

6 *Ibid.*, p. 1337.